

この2年、校長先生方には先の見えないコロナ対応に適切に御対応いただき感謝申し上げます。皆さんのリーダーシップのもとで、学校は感染症対策をしっかりととりながらも創意工夫を重ねて子供たちの「学び」を確保していただき、これまで大きな混乱もなく教育活動が進められていることに、改めて敬意を表します。

さて、仕事を進めていくときに、今進んでいる方向は正しいのかなと気になることはありませんか。10年ほど前、教職員の服務事務を所管していたころ、当時はわいせつ行為をした教員でも懲戒免職とはならず、停職にとどまる事案がいくつかあり、復職時の人事配置が大きな課題でした。わいせつ教員であっても、復職させるからには少なくとも再発の心配はないことを人事担当として確信できなければ、校長や教委に受け入れてもらえません。そこで取り組み始めたのが「内省プログラム」。停職期間中から徹底的に内省をさせることにしました。「内省」とは、自身に実際に起こったことを客観的に振り返り、何がいけなかったのかを見つけて、どうすればいいのかを考えさせることで、少年院で性犯罪にかかわった少年の研修プログラムを参考にしました。外形的には作文指導です。懲戒事案を見ていくと、ここで踏みとどまることができたはずという分岐点がいくつもあります。例えば、生徒と個人的にメールアドレスを交換した時点、生徒と1対1になる場面になった時点、上司が心配して声をかけた時点など、そこで違う道へ行けば、この結果はなかったのにという分岐点です。内省は、こうした出発点や分岐点を見つけることに始まり、次に、その分岐点でどうすればよかったのかを考え、複数の分かれ道を探す作業です。その次は、なぜ、その分岐点でその別れ道へ行ってしまったのかを客観的に見つめなおす作業。こうしたことをレポートに書かせ、当時の教育研究所長とともに、時に厳しい言葉を交えて指導を繰り返したものです。結果的に私がかかわった教員で、これなら大丈夫かなと思えたのは1人だけ。嫌気がさして退職したり、内省が表面的で単なる反省文でしかなく、何も変わらない人もいました。

この「内省」は過去の出来事に対してのものですが、私はこの経験を通して、自分は正しい仕事をしているのか、正しい方法で目標に向かっていくのか、分岐点がどこにあるのか、分かれ道はどこにどんな道があるのかを現在進行形で見つけ出そうとする作業を身につけることがたいせつだと思うようになりました。(ちょっと偉そうだけど)

この2年あまりのコロナ対応を振り返ると、こうした作業の繰り返しだったなと思います。学校行事のもち方、分散登校の可否、学校再開に向けた段取り、部活や少年団活動の基準の考え方、フローやマニュアルづくりなど、そうしたことの一つ一つに分岐点と分かれ道(選択肢)を探すといった作業です。分岐点が見つけづらい時や選択肢が足りないようなとき、嫌な予感がして立ち止まらずにはいられないとき。こういう時には、たとえ道教委の指示であっても鵜呑みにせず、鶴居村にあてはめる作業を心がけました。こうしたときに必要なものは「議論」です。その議論に加わっていただいたのが校長会の皆さんであり、心から感謝しています。議論せずに先に進んでしまって、ちょっと勇み足だったかなと思うことはいくつかあります。ハンカチマスクとか、鶴居中の教室分散作戦とか、経費の無駄使いだったかなって。独断で先走ることなく、知恵を出し合うための「議論」が必要だと思いつくづきます。コロナ対応は益々混迷を深めてきました。これからも皆さんと議論を重ね、方向を誤らずに進んでいきたいと思っています。ちなみに、自分の責任を分散させようなどといった姑息な気持ちで言っているのではありませんので誤解のないよう。